

文語日誌（平成二十六年十一月十一日）

神保町界限は世界一の古書店街にして、小生にとりては以前職場に近きこともあり、言はば庭の如きものなり。幾つかの書店の特定棚を定點観測するに、一日として變化無きこと無く、物流の熾なることぞ推して知るべき。そこを舞臺に繰り廣げらるる「神田古本まつり」、讀書の秋稿例の風物詩として、年々歳々盛會となりゆくを見るは悦ばし。今年の第五十五回には二度赴く。收穫物は以下の通り。

一「檀上より國民へ」三宅雄二郎著（金尾文淵堂、大正四年刊）八千六百圓也。これまで三宅雪嶺（一八六〇年生、一九四五年歿）の著作はその殆どを収集したるも、本書はその缺落を補ふべく、この數年來探し續けたるものなり。雪嶺の講演記録をそのまま本の形としたれば、本人の語り口、手にとるが如く、臨場感あり。

「長州人」にては、井上侯に見らるる如く長州人は一般にずるがしこしと言はるるも、吉田松陰、乃木大將はそれを打ち消すとす。

「大隈伯著國民讀本を讀む」にては、大隈伯は全く文字をお書きにならず口の人なれば、今後此の本を演繹する御演説、御講義、御説法に待たねばならぬとす。

「慶應義塾論」にては、もともと士族に商業上に必要なる知識を授くるが塾風なりとす。從來塾出身者には金満家の子弟多く、年を経れば樂隱居して何事も別に新しき事を爲すもの少なく、犬養尾崎の如きは除外例の如きものとす。

二「大愚 三宅雪嶺」五斗兵衛著（武藝社、大正五年刊）五千四百圓也。本書、その存在のみは知りたるも、現物を手にする機會は初めてなれば、興奮覺めやらず。本書、雪嶺を勉強する者にとりて必讀の書とこそ言ふべけれ。五斗兵衛ごとうべゑは後藤又兵衛に由來す。「大愚」は「大賢」の更に徹底的に垢抜けしたるものとぞ。

「雪嶺と發賣禁止」にては特に五十頁にわたり、雑誌「日本及日本人」の新聞紙條例による發賣禁止問題につき、詳細なる國會議事録紹介せられ、大層興味深し。

三「縮刷世の中 正續二冊」三宅雪嶺著（大正五年、十年刊）四千五百圓也。既に所有せる書籍なれど、保存状態良ければ敢て購入す。名著なれば、勿體無しとは思はず。

○人に崇拜せらるる者のみが生き甲斐あるに非ず。僅かなりとも從來の状態より善き方に向けたる跡あらば、皆生き甲斐ありとなすべきなり。

○美酒佳肴も慣れては別段の愉快に非ず。浦島太郎もタンホイゼルも慣るれば別段の事なし。・・・伊藤公桂侯の生活、愉快と思はるるは年と共に境遇の進みたる所にあり。

（追記）三宅雪嶺に關しては、「文語の苑」ホームページに拙文「三宅雪嶺の主要著作に就きて」（上、中、下）を掲載したところなれば、興味ある方は参照せられたし。

